



OVERSEAS

Republic of the Union of Myanmar

— ミャンマー連邦共和国 —

海外事情



ミャンマーとの絆と未来への思い



森崎 成宏 MORISAKI Narihiro

日本工営株式会社／鉄道事業本部／鉄道事業部／鉄道技術部／ヤンゴン環状線開発事務所長

まさに夢と希望に満ちあふれた瞬間だった。2015年ミャンマー連邦共和国の総選挙でアウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟（NLD）が圧勝した。

私は現地で国民の熱狂を直接感じた。彼女が国家顧問の職に就き国のトップとなった2016年、その熱狂ぶりはピークを迎えたかの様だった。自由と民主主義を勝ち取った国

や国民の有り様をこの目に焼き付けた。

初めてのミャンマー

私は1992年に日本工営に入社し、海外のダム・発電・河川工事を担当する部署に配属された。ミャンマーへの最初の渡航は、1995年3月、水力発電計画の調査が目的だった。私にとってはミャンマーで

の初めての業務、期待と緊張感で日本を出発したのを覚えている。ヤンゴンに到着し、ミャンマー電力公社（MEPE）の一室を与えられ、上司と共に業務を開始した。

1週間後、発電サイトの現場踏査に向け、20人程の陸軍小隊に前後を警護され、早朝ヤンゴンを出発、タイ国境に近いモン州とカレン州の州境のダム予定地に近い軍宿営地



写真1 仏教信仰の象徴シュエダゴンパゴダ



写真2 お釈迦様 仏陀像



写真3 ヤンゴン環状線 インセイン駅



写真4 田園都市ヤンゴン（ランゲーン）

に入り調査を開始した。当時の軍事政権とカレン州の反政府組織は内戦状態にあり武装兵士が常時我々を警護した。

現地の強い日差しの中での作業、異国での慣れないコミュニケーション、武装兵士の警護による緊張感のせいか、宿営地に戻って浴びる冷水と食事は格別なものだった。現場の暑い日差しの中警護に当たった兵士達や宿営地で食事や洗濯の世話をしてくれた女中達と過ごした数日間は今でも忘れられない。ミャンマー人の頼もしさと優しさに初めて触れた一時であった。

ミャンマー人の仏教観

多民族国家ミャンマーには、130以上の民族が存在している。しかし宗教別の人口比率は仏教徒が約9割を占め、ミャンマーの様々な伝統的なしきたりは仏教の影響を強く受けている。輪廻転生を信じるミャンマー人は、死後の遺骨を重視せず、また墓を作らない。火葬されても骨上げの儀式もなく、希望しない限り遺骨は捨てられる。ヤンゴンなど火葬場がある都市では火葬するが、火葬場が無い地方では土葬する。

埋めた後はほったらかしで墓参りなどはしない。お盆やお彼岸など一年を通して故人を弔う日本人から見たら信じ難い光景だ。

この国に長く滞在すると、現地スタッフやその両親などの死に遭遇する。お葬式では参列者は香典の様にお金を渡すが、家族が集まったお金のほとんどを僧侶や寺院に寄付する。僧侶や寺院はあの世（故人）とこの世（家族）を結び人間の真理を解く存在であり、僧侶や寺院へのお布施や寄付は分かり易く“徳”を積む手段なのである。托鉢の僧侶に食事を提供するのもその一つである。

ミャンマー人の仏教思想ではこの世（生前）は仮の世界であり、あの世（死後）にこそ人間の真の世界が存在するという。金銭物欲に関心が薄く、また生（この世）に対する執着心も日本人程強くない。日本人は立派なお墓をつくり、故人や自分自身をこの世に留め、物欲も満たされたいと願うが、この国では違う。故人の魂はあの世に行き、自分もそこに行きたいと望むのだ。お寺や僧侶に多額のお金を寄付し、また遠くから来た客人は丁寧にもてなす真心を

忘れない、これらはあの世に行くための徳を積んでいるのである。

我々も子供の頃、親からよくあの世には天国と地獄があり、嘘をついた人間は死んだら地獄に行くと言われ、人間は生を受けたからには「生涯誠実に生きなさい」という仏教の教えから来るものだが、一期一会、人と人とのふれあいを通じて四苦八苦しながらもこの世で徳を積み、一所懸命生き抜くことがミャンマーの慣習の根底にあるのだと感じる。

ミャンマーの変化と社会情勢

1945年の終戦からミャンマーの政治・民主化運動の流れをみると、(1)アウンサン将軍や初代首相ウーヌらによるビルマ独立の20年、(2)1962年ネ・ウィン将軍のビルマ鎖国期とも言われるネ・ウィン一党独裁時代の20年、(3)1988年の大規模な民主化デモ（8888事件）と90年代のアウンサンスーチー氏率いるNLDによる民主化運動の全国展開と2016年民主政権の発足迄の約30年、(4)2021年クーデター発生迄の民主政治の5年間、の4つの時代に分けられる。戦後78年間の中で



写真5 2.1.21クーデターへの市民の抗議

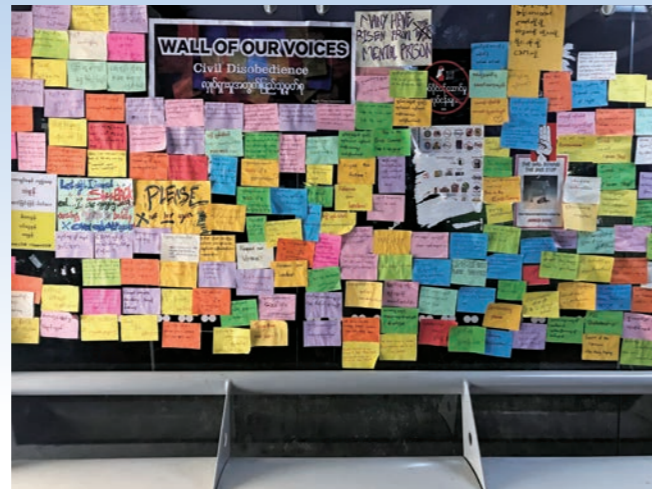


写真6 クーデターに抗議する市民の短冊



写真9 メイティエーラ湖畔の風景



写真10 ミャンマー国鉄職員と旧三陸鉄道車両

ミャンマー国民が、民主的な政府を樹立したのは2016～2021年の僅か5年間しかない。未だに民主主義を享受できないミャンマー国民にとっては戦後は続いているのだと感じる。

再びミャンマーへ

2015年12月、20年ぶりのミャンマー渡航は鉄道の仕事だった。ヤンゴン市内の環状線鉄道(約47km)とミャンマーの第一・第二の都市を結ぶヤンゴン・マンダレー線鉄道(約600km)、この2つの既存鉄道

を日本の円借款により修復するプロジェクトである。

2021年2月1日早朝のクーデター発生時、私はヤンゴンにいた。1995年の民主化運動と2015年の民主化達成の“暗”と“明”を現地で見ただけには衝撃的だった。民衆の夢と希望は、斯くも脆く崩れ去るのかと。クーデター発生と同時に、全国各地の市民や学生、教師、僧侶そして公務員も街に出て次々と抗議の声を上げ、全国的なゼネストへと発展した。コロナ感染者がピークを迎える中、公立病院は診療を中断し、国軍と

クーデターに明確な拒否の姿勢を示した。夜になると、人々は家に帰り夜8時を合図に一斉に鍋底を叩いて抗議の声を上げ続けた。この銅鑼に似た音で悪霊を追い払うのだと言う。しかし、軍はまたしても国民に銃を向け発砲した。国軍の暴力で殺害された市民は公式では8月22日現在3,966人に達している。

コロナ感染拡大

2020年2月コロナ感染は、ヤンゴン環状鉄道プロジェクト終盤にあった我々を突然襲った。全職員や請

負者に感染対策と注意を促す中、ミャンマーの医療機関は設備が十分でなく感染者を正確に把握できない事情を察してもヤンゴン市内の感染者と死者数の急激な増加は不気味だった。沿線では数百人もの労働者が工事に従事しており、プロジェクトの現場が集団感染の温床になる可能性もあった。現場の感染対策に奔走する毎日だった。

2022年2月漸く土木工事が完了した。ワクチン接種の効果もあり、既に感染のピークは過ぎていたが、約2年間のコロナ感染下のプロジェクトで、請負者の責任者や労働者など数名がコロナの犠牲になった。私の事務所では職員は感染だけに抑えたが、親兄弟・親戚が犠牲になった職員が数名いた。

2021年2月のクーデターは、1年前の2020年2月から始まったコロナ感染拡大で疲弊したミャンマーの国民と経済に想定外の追い打ちをかけ、さらに深い傷を残した。

祖父への思いと遺産

祖父は1943年7月に当時21歳でビルマに出兵し、1945年3月16日、中部の都市メイティエーラで戦死し

た。私は、地元長崎の戦友会を訪ね、祖父が最後に戦死した場所や作戦について知った。驚いたのは、祖父が日夜続く激戦と過酷な気候で同僚や部下が病死・戦死する中、2年近くもこの地で生き抜いたことである。

祖父は、妻と幼い子供2人の元に一日でも早く戻りたい一心で異国の地で“生への執着心”を保っていたに違いない。しかし果敢に突撃・戦死の憂目に遭い、この地で生涯を終えた。その最期の姿は軍医の検死記録に残されていた。戦争の惨めさ虚しさを思い知らされた瞬間だった。

私は、2018年に鉄道プロジェクト中に、同僚を病気で亡くしている。同僚の最期をヤンゴンの病院で看取ったあと、何も助けてやれなかった自分の不甲斐無さで自分を責め、プロジェクトを預かる責任者としての適性を疑い自信を無くした時があった。

しかし励まし続けてくれた上司、同僚、現地スタッフがいたおかげで何とか踏み留まることができた。戦時下のビルマで2年近くを生き抜いた祖父に思いを馳せ、プロジェクトをやり遂げる覚悟を決めた。

ミャンマーとの絆と未来への思い

1995年の初渡航と2015年からの再渡航も含めてこれ迄足かけ8年余りミャンマーに滞在した。このミャンマーでの生活と実体験は、私の人生の中で特に意味深い。特に影響を受けたことを一言でいえば、“人間”と“生・死”についてだろう。人は生まれる時は、何の目的もなく生を受けるが、人は生を受け生きる過程で、人生の目的を見出す存在である。生きる過程でよい目的を見出すには、よい生き方・よい考え方を身につけなければならない。ミャンマーの人々は、この世で徳を積んで来世(死)を迎えるため、よりよく生きようとする。人との出会い、もてなし、助け合いを大切にしているミャンマー人は人生を豊かにするヒントを数多く持っている。ミャンマーは今苦しい状況にあるが、身をもってより良い人間また生き方とは何か教えている様に思える。祖父の存在(ビルマでの生死)が無ければ、私はこのミャンマーで、人生の価値観を高めたいとする気も起きなかっただろう。祖父とこれ迄プロジェクトに関わった関係者、ミャンマーの人々に心から感謝し、そしてミャンマーの真の平和を祈念したい。



写真7 コロナ期の工事現場(ヤンゴン環状線)



写真8 メイティエーラ日本軍(菊兵团)の慰霊碑